



市読書感想文コンクール 市長賞受賞作品紹介

毎年開催している市読書感想文コンクールは、今回で53回目を迎えました。市内小・中・高等学校から寄せられた41編のうち、本号では市長賞を受賞した作品を紹介します。



★市長賞

命のリレー

安田小学校4年 伏谷 羽都音さん

「あたりに住む人の安全のためにしかたなくこぼされたそのクマの巣あなには、生まれて間もない二頭の子グマがのこされていた。」どうしてしかたなかったんだろう。まだ目が開いていない子グマ達は、生きていけるのか。

この本は、そののこされた二頭の子グマを保護して育てた佐世保市いしだけ動物園の話だ。九十の動物園の中から手をあげた江頭園長は、子グマがなにか大切な事を伝えようとしている気がして強く心を動かされた。わたしも、心の中で何度もがんばれと思いがら読んだ。でも、こぼされた母グマのことも気になった。しかたなくこぼされたってなんだろう。しかたがない命であるのかな。きっと、何度も町にあらわれたのは子グマ達におっぱいをあげるためにエサをさがしていたからだろう。こぼされた母グマだけじゃなくてエサにこまってる人の住むところまで出て来てしまふ動物は、ほかにもいると思う。わたしの住んでいるところでは、イノシシが山からよくおりてくる。イノシシは、畑をあらしたり人に向かってくることもあってあぶないから、こまるとみんな言っている。わたしもイノシシに出会ったらこわいから、走ってにげると思う。動物園で見た本物のクマは、とても大きかった。あんな大きなクマが何度も町にあらわれたら人がこわがるのは、当たり前前だと思う。でも、だからといって「しかたない」で終わらせていいのかな。同じことをくりかえしたら、いつか野生の動物はいなくなってしまう。本の中でも、「なぜこんな悲げきがくりかえされるのかが問題だ。」と言っている人がいた。クマだけじゃなく、動物の命の下には鳥や魚や虫、たくさんの命のリレーがある。人も、そのリレーの仲間だと思う。たくさんの生き物がいて、生き物達が住む山や海を大切にすることが人間を守ることにつながるんじゃないかな。

子グマ達は、「わたし達は何もしていないよ。一生けん命生きてるだけ。」と伝えるためにやってきたんだと思う。そして、育つはずだった山や森などの自然かんきょうが、どんどんなにかいされていることを人間は気付いていかなければならない。子グマの美海と元気は、いしだけ動物園のスタッフのおかげで立派に育ったからともうれしい。でも、二頭は野生じゃないし、ペットとしてもかえないし、一生動物園のクマで生きていくしかない。それは、とても悲しいことなんだということをわすれてはいけないと思う。

この夏休みは、海へ遊びに行った。わたしの家のうらには山がたくさんある。海や山には、いろんな命がわたし

といっしょに今いきている。でも、中には住むところがなくなったり、食べるものがなくなったりして、消えていく命もたくさんあることを知らなきゃいけないと思った。そして、なぜそんなことになったのかを考えることが、命のリレーにつながるんだと思う。そうやって、わたしも命のリレーのバトンをつなげたい。

※読んだ本
「やんちゃ子グマがやってきた！」
森からのメッセージ」
あんず ゆき（フレーベル館）

★市長賞
小野中学校1年 斎藤 雄成さん
悪いのは？
僕は、悪くない。悪いのはあいつだ。こんなふう言い訳をしたことはないだろうか。
銀のライオンはみんなに優しくして、次の王になるべき存在だと誰もが思っていた。しかし、王になりたい金のライオンは、銀のライオンに嫉妬し、どうにかして自分が王になれるように、銀のライオンの悪い噂を広めて歩いた。なんてひきょうなやつだと僕は腹が立った。でも、きつとそんなうわさは誰も信じないだろうと思っていた。確かにはじめは誰も信じようとはし

なかった。ところが、そのうわさはじわじわ広まっていった。そのうわさを知っている人が増えていくことで、あの人もこの人も知っているのなら……と銀のライオンを疑う者が現れ始めた。「ひょっとすると本当かもしれないね。」「たしかにね、みんなそう言っているし……火のないところに煙は立たないっというからね。」

すると、事実かどうか確かめもせず、うわさは事実として広まっていった。転がる雪玉のような勢いで。

そして、金のライオンが王になり、国は荒れ果て、国民は仕事も家も土地も、生きる希望までも失ってしまった。その時、

「もし銀のライオンが王様だったら、こんなことにはならなかったのよ。」

と国民は嘆いた。金のライオンを王に選んだ自分たちが悪いと反省する者はいなかった。

僕は、なんて自分勝手なんだと腹が立った。うわさを信じ、広めた国民のせいじゃないか。金のライオンだけを悪者にするのはおかしいと思った。

しかし、その時、ふと最初のページに書かれていた「これが全て作り話だと言いつけるだろうか。」という言葉を思い出した。うわさをうのみにし、金のライオンを王に選んでおきながら、全てを金のライオンのせいにした国民と同じようなことを、僕はしていないだろうか。僕は、悪くない。悪いのは

あいつだ。こんなふうに言い訳をしたことはなかっただろうか。SNSやテレビの情報を、本当かどうかと疑ったり、確認したりしたことがあっただろうか。間違った情報をうのみにして、広めてしまったことはなかっただろうか。

これまでの自分を振り返り、自問自答すると、無性に怖くなった。僕も悪に加担していたかもしれない。

この本を読むまでは、意地悪をする人やうそを言う人だけが悪いと思っていた。しかし、人のせいにして、自分の行いを振り返らない人も、周りの意見に流され、自分で考えることをしない人も、見て見ぬふりをして行動しない人も、みんな同罪だとこの本を読んだ。悪いのは金のライオンだけではない。国民の行動にも問題があったのだ。

本を読んで、国民の行いを客観的に見ることで、僕の中にも国民と同じ面があったことに気がついた。

友達が意地悪されているのに、助けあげられなかったことが僕にはある。自分が意地悪されるのも嫌だけれど、大切な人が傷つくのは、本当に悲しいし、見ていられない。

しかし、その時に意地悪をする子に立ち向かうのはすごく怖い。今度は自分がやられるかもしれないと思ったら、行動できない。だから、見て見ぬふりをしたり、その場から立ち去ったりす

ることしかできなかった。

仮に間違っていると思っても、良くないことだと分かっているとしても、それを声に出して伝えることはとても怖い。みんなと違う意見を言ったり、違う行動をしたりすることは、とても勇気のあることだ。どう思われるか、否定されたらどうしようと思ったら、動けなくなる。

僕も、物語の中の国民と一緒にだった。見て見ぬふりをしたり、事実かわからないことを確認もせずうのみにして広めたり、大切な人の味方になってあげなかったり。そんな一面が僕にもあった。

物語の最後、この国で起こったことの一部始終を見ていた雲が、

「誰かにとつて都合のよい嘘が世界を変えてしまうことさえある。だからこそ、なんどでもたしかめよう。」

とつぶやく。そして、誰もいない荒れ果てた大地の様子で物語は終わる。

悪意をもって悪いことをしたのは、金のライオンただ一人だった。他の人たちの中に悪意をもっていた人はいない。しかし、悪気のない人たちの行動や選択によって、国はどんどん悪い方向に進み、ついには滅んでしまった。

つい雰囲気流されてしまうことがある。自分の意見を言わず、周りの様子やうかがって合わせてしまうことがある。でも、それでは、誰かにとつて都合のよいように振り回されてしまう。

それでは、大切なものを失ってしまう。そんなの嫌だ。だから僕は、確かめ、考え、自分の言葉で伝えていこうと思う。

※読んだ本「二番目の悪者」

林 木林（小さい書房）



「手話」をやってみよう！

【今月の手話】 厳しい・辛い・きつい

左手の甲を右手の2指でつねる仕草をする。

【問い合わせ先】

市障がい者福祉課 ☎ 31-0251 FAX 31-8120